

災害被災者支援と災害対策改善を求める広島県連絡会（略称：広島県災対連）

# 広島災対連NEWS

NO22 2016年6月14日発行

事務局：広島県労連 広島市東区光町 2-9-24-205 TEL082-262-1550 FAX082-261-5059

ブログ//h-kenroren.cocolog-nifty.com// [E-mail/bwz23598@nifty.com](mailto:bwz23598@nifty.com)

## 「ありがとう！」被災者の願いを救い出しました 31℃超えのなか、チーム広島 12人が奮闘



◇押しつぶされた1階に、覆い被さる屋根家財を、一つひとつ取り除けながら。  
失くしちゃいけない ご家族の大切なものを、探しながらすすめていきます。  
私たち12人チームと 重機つき解体業者さんでも、  
2日目でもまだ半分以下。  
こちらの周りは全部、まだ1階が隠されたままです。  
広島ではあたかも「終わった」ように見せられていたもの。（医労連・藤本健）

◇14日、快晴。今日は、一回目の地震で倒壊したお宅の解体作業を手伝いました（午後もします）。  
重機が建物を少しずつ壊し、ボクラチーム広島がテレビや仏壇などを運び出します。

実印など探していたものを見つけると、大変喜んでいただき、ボランティアにきて良かったと思います。

2ヶ月前の夜9時半ごろ、一回目の震度7が襲い、奥さんは5歳の息子さんを風呂に入れていました。建物は倒壊し電気も切れ真っ暗。息子さんは激しい揺れでどうやら湯船のなかから放り出されたようです。慌てて子どもを掴みましたが、天井が落ちて脱出できない。

一時間後に助け出され、家族全員無事だったそうです。

さまざまなものを運び出しながら、壊されたのは、建物というより、暮らしなのだと思います。(二見伸吾)



◇2日目。ボランティア内容は木材の片付けと、衣料品等の仕訳作業。到着した家は一階部分が潰れ倒壊し、地震の激しさをまざまざと見せつけられた。

解体作業も進んでいた為、砂埃や木片が空気中に充満していた。

マスクをしていて助かった。ただメガネがないから若干目が痛い。

あいにくの快晴。

直射日光に晒されながら、瓦礫の中から、色んなものを取り出した。

お子さんが描いた絵だったり、ゲームや本。お母さんの宝物や印鑑に通帳。

潰れた仏壇や家具が出るたびに家族の方が嬉しそうに声を上げて喜んでいた。

突然襲ってきた巨大地震に、生活が一瞬で奪われたのだと分かった。

幸い家族は全員無事だったそうで何よりだった。

自分たちは今日作業をして、明日は別の所に行く。

でも、被災者の方々はこれから先も瓦礫や仕訳等、気の遠くなるような作業を繰り返してやっていくことになる。

明日は雨だそう。

仕訳した家族の宝物を今度は雨から守らなければならない。

微力ながら少しでも役に立ちたいと思った。倒れない程度に頑張ろー (全教広島 金子邦彦)

◇倒壊した家から生活用品を取り出す作業です。

瓦礫は木材、瓦、石膏ボードなど仕分けをします。

大切な物が屋根の下から出て家の人が喜ぶと作業してる皆も喜びます。

暑い中、砂ぼこりの中けっこうキツイ作業でした。

午後にはおばあちゃんが来て ありがとうねと言われると来て良かったとしみじみ思う。(林拓)

◇30度を越える真夏の暑さのなか、全壊した家屋から、生活用品を取り出す作業でした。使えるもの、捨てるものを分けながら、さらに捨てるものを分別する作業です。「この辺に、〇〇があるはずばってんが…」被災者の方のつぶやきになんとか見つけたいと思いながら瓦礫を掻き分け、見つかるたびに歓声があがりました。四世代家族のたくさんの思い出が詰まった家屋。重機と手作業を繰り返しながら、残っていた屋根の形が今日1日でなくなりました。作業が進んだ充実感と、どこかさみしい感じが入り交じった複雑な気分になった今日の作業でした。(全教・藤中茂)

支援活動 2 日目。今日は益城町社協ボランティアセンターに団体登録し、被害中心部で、家の解体作業と共に、その家の貴重品を掘り出す作業です。

宮城から応援 5 日目の菅原さんの指示のもと、ユンボが解体した後の瓦礫処理を行いました。実印や通帳などの貴重品が 2 ヶ月ぶりに見つかった時の奥さんの嬉しそうな顔を見ると、疲れも吹っ飛びました。綺麗なままの電気毛布が見つかり、「震災の時はまだ寒かったの



よ」と話された時は、時間がたったんだ、と感じたものです。この家はほぼ、全壊＝ペシャンコですが、当時 4 人いた家族みんな無事なのは何より。5 歳の子どもさんは入浴中で、お母さんが暗闇の中、手探りで、崩れた壁や梁の中で見つけた時は、本当にホッとしたと聞きました。。まさに九死に一生を得たそうです。

また、91 歳のおばあちゃんは、天井が落ちてきたが、ソファの隙間で助かり、2 時間半後に救出されました。位牌やバックが見つかる、「ありがとう」と二見氏の手をとってお礼を言われました。書道 5 段の腕前や、今日見つかったご自身作の手提げカバンを見せ、自慢そうに話されました。今回の依頼者の周りは、全壊の家が何軒も手付かずで 2 ヶ月前の光景のまま、残っています。まだまだ続く復旧作業。ボランティアの助けも必要です。益城町ボランティアセンターでは、今日のボランティアは 300 人を越えたとのこと。まだまだ続く復旧作業。ボランティアの助けはまだまだ必要です。(県労連 門田勇人)

◇益城町の支援先は、屋根を覆ったブルーシートが印象的であった。依頼者のお宅を破壊していくというのは辛い作業であった。瓦礫の下から現れる震災前の日常の生活が、胸を刺す。掘り出された過去の思い出にも、未来への希望にも、依頼者の笑みがこぼれた。破壊の作業は、新たな出発の作業になった。屋根を覆っていたブルーシートは、仮住まいのテントとなって、青い空を映していた。(全教 石田誠)

◇倒壊した民家の解体作業のなかで、家族の大切な品が出てくる度に歓声が上がって、暑さも疲れも吹き飛びました。周りには傾いた家ばかり。ボランティアはこれからまだまだ必要です。(民商 居神友久)

◇益城町支援 家屋を解体し必要なものを探す作業、朝 9 時から 4 時近くまで、汗だく衣服は真っ黒。大事なものも発見。まわりの家屋はまだ多くが手つかず、支援は必要だ。(自治労連 亀井正美)

◇個人宅の家屋解体と、それにとまなう生活物資の運び出しを行いました。2 階建ての家は一回目の地震でまっすぐ立てに潰れたとのこと。幸い住人は怪我だけですんだそうです。30 度ぐらいの日



の照る作業となりました。アームつきのショベルカーが壊すと13人で木の破片や家電、衣類、生活の全てを運び出します。

ミシンを運びだされた時はおばあさんが大変大変喜ばれました。それを見ると私も嬉しくなりました。また、作業の指示をしておられた住人の30台の女性が大変明るい方でいろんな物が見つかるたびに喜ばれ、私たちに話しかけてくれました。作業としてはきつかったですが、住人の役に立っていることが分かり、気持ちは疲れませんでした。地震から2ヵ月たった今、今日会った被災者には作業の中で笑顔がありました。

うまく伝えられないけど、みんな顔がいいのです。私はそう感じたけれど、被災者から私たちの顔はどうみえたのでしょうか？ ああでも今、思い出すと、皆で話していたときは皆、笑顔でした。今日、いいボランティアができました！（広島県医労連 石川昇）

◇災害支援2日目終了。一日かけて被災家財の仕分け、と言うより発掘作業。一階部分が完全に潰れた家屋を重機が少しずつひっぺがし、そのあとを人力で掘り起こし。何しろ4世代が暮らしていた家、4世代分の色んなものが次々に出る。日用品、家財、山のような服、和服、思いでの品々。人の歴史にすかさずと踏み込んで行くようで恐ろしい。とうとう終わり切れなかった。

作業終了後、あの熊本城に全員で行く。城の構えと偉容に圧倒される。同時に、天守閣、石垣等の破損の酷さも目の当たりに。これは大変です。（広島県県労連 川后和幸）

◇2日目。益城町で潰れた家の解体・分別作業を行ないました。その家のみなさんは全員ご無事でした。

本や布団などは家庭ゴミとして災害ゴミと区別しなければならないとのこと。災害によって発生した本や布団なのに家庭ゴミとして分別しなければならないなんて…。

重機で潰れた家の屋根や壁・骨組みなどを壊した跡をみんなで分別しながら使える生活用品は大事に撤去しました。仏壇やベッドなど殆どのものは壊れていました。洋服や子どもさんの教科書など思い入れのありそうなものが出てきたときには何ともいえない切ない感じでした。

91歳のお婆ちゃんが最後までお辞儀をして見送ってくださった姿が印象的に残っています（国労 徳永）

